（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（地域研究）	氏名	若林　啓史
論文題目	キリスト教徒虐殺事件　― 一八六〇年 ダマスクス ―		

（論文内容の要旨）

本論文は、1860年にオスマン帝国統治下のダマスクスで発生し、多くの犠牲者が出た宗派抗争事件に関する研究である。一次資料多数に基づき、当事者となった三人のアラブ人キリスト教徒、3人のイスラーム教徒を主要人物として取り扱っている。全体は序論及び第1章から第8章までの本文と結論、付録である未公刊のアラビア語史料2点の和訳・アラビア語原文から成る。

序論では、本論文の主題および基本方針を提示した上で、1860年事件に関する基本的史料及び研究史を概観する。さらに、本文で解明すべき具体的な課題、すなわち①1860年事件に対する従来の認識の妥当性、②シリアのイスラーム教徒とオスマン帝国官憲の対応の再評価、③事件に対する宗教的動機の深度、④事件を契機とするシリアのキリスト教徒の政治的覚醒の解明などを提起する。

第1章は、基礎的事項の概説である。シリアのキリスト教共同体の歴史と性格、イスラーム支配下におけるキリスト教徒の境遇、オスマン帝国の改革とキリスト教徒への影響、列強の角逐と諸教会の関係などを説明する。併せてレバノン山とダマスクスの騒乱の概略を解説する。

第2章では、キリスト教徒の医師・著述家であるミーハーイール・ミシャーカを取り上げる。彼は米国副領事を務めるなど、19世紀の動乱を間近に見聞する立場にあった。彼の著作は、ダマスクスの事件発生が総督府の差し金によるとの、キリスト教徒に一般的な認識を示している。

第3章では、正教会アンティオキア総主教座の司祭ユースフ・アッディマシュキーを主人公とする。ユースフ司祭は正教会信徒の啓蒙に努め、彼らをカトリックやプロテスタントに改宗させる試みに対し、神学面から対抗した。1860年事件で彼は殺害されたが、弟子の中からアラブ復興運動に携わる人々が輩出した。キリスト教徒の政治的覚醒を解き明かす上で重要な人物である。

第4章では、正教会信徒アルビーリー父子を対象とする。父ユースフ・アルビーリーは、総主教座学校の教師となった。1860年事件を契機にベイルートに移住し、教育に従事した。1878年妻と6人の息子、一人の姪を率いて米国に移住した。アルビーリー父子は、ムスリムとの共存に悲観的であったが、彼らの思考を追うことによって、宗派を超える連帯感の模索が理解される。

第5章では、ムハンマド・アブー・アッスウード・アルハスィーブーを中心として、ダマスクスのイスラーム教徒名望家層を群像として描出する。彼は1860年事件の直後約一年間拘束されていたが、釈放後公的活動に復帰した。この頃、目撃した事件に関する詳細な記録を残している。個々のイスラーム教徒名望家の内面まで分析することを通じて、彼らが従来考えられたほど宗派的敵愾心を抱いていなかった事実が浮かび

上がる。

第6章では、アルジェリアの指導者であったアブド・アルカーディル・アルジャザーイリーに関して考究する。彼は仏軍と15年にわたり闘い、和睦してフランスに移送された。流謫地ダマスクスで1860年事件に遭遇し、外国居留民や現地キリスト教徒の保護に全力を挙げた。彼がキリスト教徒を保護した動機を、事件認識や政治行動とともに分析する。

第7章は、ダマスクス総督アフマド・パシャについての評伝である。彼は西洋式軍学校に入校し、ウィーンに留学した。帰国後軍学校長に就任し、クリミア戦争ではルーメリ軍参謀長として軍功を挙げた。サロニケ州、ルーメリ州、ダマスクス州の総督を歴任したが、1860年事件の責任を問われ、銃殺刑に処せられた。従来曲解に基づいて描かれてきた人物像の見直しを試みる。

第8章はダマスクスとレバノン山における事件の顛末を抄録し、事件が後の時代に及ぼしたいくつかの影響を指摘する。この事件は過去のものではなく、現代の中東情勢、特に歴史的シリア地域を理解するために不可欠な材料を提示している。

結論においては、ダマスクスの事件の定式的説明の根拠となった史料群を横断的に採り上げ、本論での研究で明らかにした事実との対比によって、その妥当性を検証する。さらに、序論の課題に対応して、①ダマスクスにおける事件がオスマン帝国官憲・イスラーム教徒・ドルーズ派の陰謀によって引き起こされたとの主張は客観性を欠いていること、②現地のイスラーム教徒には、積極的に襲撃に加わった者もいたが少数であり、大多数は恐怖によって事件を傍観したこと。また、彼らのうちにキリスト教徒の保護に努めた者もかなり存在しており、オスマン帝国官憲も不十分ながら事件発生防止や救助に努めたこと、③事件の宗教的動機は否定されないが、襲撃者の大半は略奪等を目的としており、単に宗派対立による事件と性格づけるのは一面的であること、④事件は、シリアのキリスト教徒を政治的に覚醒させ、ムスリム隣人との連帯を目指す者や列強の庇護下に独立を目指す者などに分かれたこと、などを柱として研究成果を要約する。

付録に掲げた史料は『シリアの嘆息』及び『悲哀の書』の２点である。両写本共に、その重要性にもかかわらずアラビア語原文は未公刊であり、外国語訳も存在していない。そのため、和訳と共に写本を厳密に校訂した原文を研究者のための参考に付している。

（ 続紙 ２ ）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、1860年にダマスクスで起こったキリスト教徒襲撃事件を取り上げ、これをオスマン帝国官憲・イスラーム教徒・ドルーズ派の陰謀によって人為的に引き起こされた宗派紛争の一例とする通説に疑問を投げかけるものである。著者は、その多くが未だ写本の状態でのこされている一次資料を博捜し、それを丹念に読み解くことで、その通説を突き崩していく。

第1章で本事件の背景と概略について説明したうえで、第2章～第7章において6人の遺した資料を丁寧に分析して、この事件の実態に迫る。第8章では、事件の処理と後日譚が論じられる。

アラビア語一次資料の読解・分析を通じて、筆者は、この事件はむしろ偶発的に引き起こされたものであり、オスマン帝国官憲・ダマスクスのイスラーム教徒・レバノン山のドルーズ教徒が結託してキリスト教徒を迫害したものではないということを、明晰に示している。

本論文の学問的貢献は、以下の5点に集約される。

第一に、オスマン帝国の近代化の過程においてマイノリティのおかれた状況を詳細に分析し、シリア研究とともに中東地域研究に新たな地平を切りひらくことに成功している点を挙げることができる。ダマスクスという一都市で起こった事件に焦点を合わせ、それを克明に追究する論文であるが、その背景にある歴史的シリア（現代のシリア・レバノン・ヨルダン・パレスチナに相当）、オスマン帝国、さらにはアメリカをも含む国際社会にも注意を払い、分析を行っている。

第二に、これまで誰も使用したことのない史料を含めて、写本の状態にあるアラビア語原典を博捜し、これらを正確に読解している点が挙げられる。近代史を再構成するためには、幅広い史料群を読み込んで、それを元に立論することが望ましいが、本論文はその典型ともいえるものである。

第三に、前の点に関連して、重要な史料2点について、アラビア語原文校訂および和訳を行い、付録として収録している点も重要である。校訂・翻訳作業は、論文執筆に比べて、研究業績として正当に評価されない傾向がある。地道なこの作業を厭うことなく行った姿勢には敬意を表したい。

第四に、文献とともに地域研究にとって重要な臨地調査の手法をも随所に取り込んで分析を行っている点が挙げられる。長らくシリアを初めとするアラブ諸国に滞在してきた経験があるからこそ、このことが可能になったといえる。

第五に、あくまで1860年という近代の一ページだけを切り取ることに焦点を絞りながらも、事件が時空を超えて残した影響に目配りし、中東地域を考えるうえでの重要な示唆を与えている点を挙げたい。マイノリティ問題は、当該地域にとって常に大きな問題

である。それに対して、過去の歴史を対象としつつ、現代・未来を照射することをも射程に入れた論文と評価することができる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2020年1月24日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。